

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

24 天には目がある

第二十四日め（四月八日）

朝の乳茶がすむと、家人たちはそれぞれの仕事を始めた。

羊人ソヨルトは、放牧にでかけるために、ラクダを草フレからつれてくる。朝の母子とり作業のとき、ちょうど産気づきはじめたヤギを三頭、ウジチャ・ウニナー兄弟が石垣へとひっぱっていく。兄嫁トヤーはウシを追う。弟嫁セルゲレンは、草を母ヒツジ・母ヤギたちにあたえる。分家の子どもたちの面倒は、ホクシン・エージがみる。本家の子どもの面倒は、モージ母がみる。エルデニ姉は子ヒツジ・子ヤギの面倒をみている……。

あの大喧嘩以来、家族たちの仕事ぶりがすこしかわったように思える。だれもが、まえよりずっとキビキビしている。老父母のあいだでストレスがたまらないようにするために、とにかく一人一人が自分のもちぶんの仕事をしっかりはたさなければならぬ。兄弟姉妹が相談しあったのかもしれない。それとも相談などしなくても、おのずから、だれもが気をひきしめたのかもしれない。

みんなが役割を明らかにしてはたらくなかで、ダンゼン父さんの担当は、ますます仏事一色となった。きょうから読経がはじまる。その準備として、仏像などを念入りにそうじする父であった。

ラマ僧を自宅にまねこうとしたのは、ダンゼン父さんであったが、ウジチャもラマ僧の到来をまちの



聖なる首輪をつける

ぞんでいた。ウジチャは、ラマ僧がきたら、一頭のヒツジをセテルにしておうと考えていた。セテル、つまり聖なる首輪をつけて、一頭のヒツジを神聖な家畜とするために、ラマ僧に祈禱してもらおうと考えていたのである。

ダンゼン一家には、すでに首輪をつけた家畜が数頭いた。

セテルをつけたウシは、まだらのメス十五歳。大雪害のあとに、他の地方から購入されてきてから、長年オスウシをうみつづけていたというウシ。つまりおとといはじめてメスをうんだ例のウシである。これは本家のメスウシ。

セテルをつけたウマは、茶色の毛並の去勢オス。たてがみ切りをした日、首輪をつけたウマは数頭みかけた。ウジチャがいうには

「セテルのあるグーはたくさんいたけど、セテルのあるモリは一頭だったでしょ」

グーとはメスウマで、モリとは騾馬（去勢オスウマ）であるのだが、わたしにはどれだったか区

別できない。セテルをつけた去勢ウマは、ダンゼン父がウジチャにあたえたメスウマの、最初の子ウマだという。だから、記念にセテルにした。子ウマのときから手もふれず、たてがみも切らない。さすがに、去勢の作業のときには、手をふれたであらうけれども、これまでずっと騎乗用に使用しなかった。ウジチャは、自分のウマとして最初に生まれた一頭を、土地の神様にささげたのであった。

ヒツジのなかにもセテルをつけたものがある。一頭の去勢オスは、ダンゼン父が雪害を克服した記念に一九七九年にセテルにしたものであるから、すでに十歳以上になっている。エルデニチメグ姉さんの養母が、ふるさとの山にささげるためにセテルにしたのは、孤児として哺乳びんでそだてられたメスである。また、南家にいるオスのセテルは、文革のあいだ中止されていたオボまつりがはじめて再開されたとき、リンチェンドルジ兄がすもうで優勝し、その賞品としておくられたヒツジだ、という。

一般に、セテルという首輪がつけられる（セテルにする）と、神聖な家畜となり、売却はもちろんのこと、人は手をふれることもなく、放置されるものである。ただし、そのセテル畜がメスの場合は、搾乳などのために手をふれざるをえない。ここに、原則と実態のずれがあるものの、微妙な差を人びとはあまり気にしない。オンゴンとよばれることもある。

いっぽう、セテルという首輪をつけていなくても、神聖不可侵な家畜とみなされる家畜もいる。たとえば、ダンゼン父のお気にいりの老白牛や、ふとりすぎて妊娠したことがないメスの記念すべき唯一の子孫をころさないことにしてあるウジチャのオスヒツジなどである。老白牛の場合は、ダルハンにしたと表現されている。いわば労働英雄であった。

これらの家畜は、種をとわず、また首輪の有無にかかわらず、いずれも特定な個体として他から区別され、大切にされている家畜である。ここでの例にかぎってみると、セテルと称されているものは、個体としての家畜の労にむくいるといった対個体的なかわりではなく、むしろ群れを代表するものとし



セテルにされたタカはげ模様のヒツジ

て設定されているように思われる。たとえば、最初の子ウマをセテルにした例がその典型である。また、雪害とかかわるウシおよびヒツジの例も、ほとんどの家畜をうしなつたあとの再出発を期すものであることから、群れ全体の繁殖を祈念して、最初の一頭を記念化したものであるといえよう。

きょう、あらたに一頭のヒツジをセテルにすることになった。そのヒツジは、「ハラーツアイ・ハルザン」とよばれる毛色をしている。ハラーツアイとはタカのこと、タカのような色すなわち黒の毛や茶色の毛がまじっているものをさしている。かれらの説明によれば、黒を基調に、ヤガー（桃ないしは紫）などのいろいろな色がまざっている、という。ハルザンとは禿のことで、鼻面の部分が白いものをさす。つまり、タカはげというのは、両耳あたりに黒やこげ茶色の模様をもつ毛並を意味する。はげタカは、頭のとっぺんがはげているが、このタカはげは毛が抜けているわけではない。

このタカはげの毛並をもつヒツジは、この群れのなかには二頭しかない。めずらしい特徴的な毛並である。ウジチャの結婚祝いにチョルム姉さんからおくられたヒツジは、その耳印が両家のものの合成であったために、みおとされて、委託先の群れのなかにのこり、さっそく食べられてしまった。そのヒツジの代償として、ウジチャが自分でえらんだメスヒツジが、タカはげ模様である。このメスが去年うんだオスの子もまたタカはげ模様。この親子二頭のタカはげのうち、子のほうをセテルにしようという。二歳の去勢オスである。

ウジチャは、わたしのためにセテルの件をもうしたのであった。

「姉さんに、一頭のオスヒツジをあげます。セテルにするといひ。こういう逸話をもつヒツジだから、セテルにするとういと思ふ。セテルにしてあげば、記念になる。だれも殺さないし、売らない。食べないから、長生きする。たとえこれが死んでも、かわりに別のものをセテルにするから、いつまでも生きている」

そういうわけで、二歳オスヒツジのタカはげは、わたしにあたえられ、セテルにされることになった。セテルにするために、まず群れのなかからタカはげオスをつかまえないければならない。午前八時をすぎても、ソヨルトが放牧に出発しないのは、タカはげの捕捉をまわっているためだった。

午前九時。ウジチャがウマとり棹をもつて群れに近づく。何度か失敗するあいだに、群れは左右にはしりまわる。全体がちらばりながら、移動する。タカはげオスがひっかかり、これをトヤーがつかむ。群れ全体は北へ移動させる。トヤーがおさえつけているあいだに、ラマ僧がセテルをつける。

セテルは、トヤーが昨夜つくってくれた。赤い紐に、青、赤、緑、金、白の五色の小さな布切れをミシンでぬいつけたものである。ラマ僧はなにやら文言をとなえる。ときどき、小さなびんから、小麦粉のような粉を散布する。僧はこれをゴリルすなわち穀粉とよんでいる。最後に、このゴリルをタカはげ

オスの口におしこむ。そうして、セテルにする作業は終了した。

ウジチャが、

「たかさんのヒツジ（群れ本隊のこと）のところへいかないなら、すこしのヒツジ（母子群のこと）と一緒にしよう」

というのを聞きながら、トヤーは、首輪をつけたヒツジの頭を北にいる群れのほうへ向けた。群れがみえたのであろう。タカはげセテルは、群れのほうへと一目散にはしっていった。

わたしのヒツジであるけれども、けっしてわたしの自由にはならない、そのヒツジ。だからこそ、代がかわり、おなじ個体でなくとも、永遠にわたしのものでありつづけるヒツジ。その個体は、特定のものとしてマークしやすい模様と、記憶の契機にふさわしい歴史をもっている。まだ若く、そのライフヒストリーは短い、いわば前世ともいうべきエピソードがある。しかも、よその群れからやってきた新参ものであるだけに、最初の個体というイメージが付与されている。タカはげオスそのものは、去勢オスであって、再生産に関与しない。しかし、その血統が代々ふえていくことをみまもるであらう。わたしにあたえられた個体であることをこえて、ダンゼン一家の繁栄をみまもるであらう。

本来なら屠殺して食用にする去勢オスヒツジを、殺さないことにしたセテル。それは、人間がすべてを利用しつくしてしまわないための、安全弁のような存在なのかもしれない。自然のめぐみに感謝するために、象徴的に野生状態にされるのかもしれない。

ダンゼン父はわたしにいう。

「天には目がある。なんでもちゃんとみている。あの雪害のとき、うちの被害がよそより少なかったのも、ちゃんと理由のあることだったのだ」

日常の信仰心が大切だと、父は考えている。日頃の信心にくわえて、この季節にはさらに信心が必要

だとも考えている。このところ、子畜の死亡があいついでいるから、ぜひ読経をしてもらい、無事にこの出産シーズンをすごしたい、という。

午前十時、読経がはじめられた。ゲルの奥の仏さまのまえに、小さな机をおく。ラマ僧は眼鏡をかけ、机のまえに正座する。机のうえには、いくつもの経のつつみがおかれている。最初の布つつみをひらくと、金光経である。春の出産シーズンにふさわしい経なのだ、とラマ僧は説明した。

わざわざ、このように遠方の寺から僧を自宅にまねき、読経を依頼する牧民はまれである。これほど信心のあつい一家にはかならずや幸が多かろう。なにしろ、天には目があるのだから。